２０２３年１１月の総評に代えて

〇林 桂〇

●さいう●（愛知県18歳）

ほんだなの奥

から

ばにらの匂いの

月をとりだす

【評】なくなったもの、忘れたものが、思わぬ所から、思わぬ時に出て来ることがある。それがバニラの匂いの月であれば、果たしてそれは忘れたものか、なくしたものかはっきりしなくなる。ただ不思議な揺蕩いの気持が残るばかりだ。

●松下 誠一●（東京都20歳）

ぜったいに血となり肉となる牛蒡

【評】食物繊維の多いゴボウの成分に、どれほど血になり肉になる成分が含まれているかしらない。しかし「ぜったいに」と信じる気持の強さこそが大切で、否定は寄せ付けない。とにかく身体によいのだ。

●あお●（奈良県25歳）

父親が私をあなたと呼ぶ度に

桃をサラダに入れるなどした

【評】親離れした娘との距離の取り方は難しい。いつからか「あなた」と呼んで距離を取る父。不器用でシャイな父親のようにも見え

る。サラダに入れる桃の意味は読みきれない。しかし、一読印象深く忘れがたい。

●スズキセーホン●（千葉県55歳）
自転車を立ち漕ぎして行く
美少女の黒髪流れ天の橋立
【評】天の橋立は歩いて、あるいはレンタル自転車で渡ることができる。いま、黒髪を風に靡かせて美少女が渡って行く。あるいはこの像は格別なものではないかもしれない。しかし、「天の橋立」で結ぶことで、「大江山生野の道のとほければまだふみも見ず天の橋立」（小式部内侍）の本歌取りを想起させる。小式部内侍の訪れることのなかった天の橋立を、美少女は軽やかに踏んで行く。

●田崎森太●（東京都72歳）
冬の霧＜個人＞と光るタクシー灯
【評】タクシー灯の「個人」は、個人で営業していることを示すものだが、作者が見つけた〈個人〉は、人間存在としての個人である。こんなところにも〈個人〉がいる。

●こはくいろ●（大阪府19歳）
傷みには種類があって
ひかりより
まぶしいものを握る練習
【評】医者の問診では、どのような痛みかきかれる。ズキズキ、シクシク、チクチクなど。「ひかりより／まぶしいものを握る練習」

で耐えようとする痛みは複数で複雑な痛みのようだ。多分に心因性の痛みであろうか。

●辻村陽翔●（北海道19歳）
寒椿我らの死後の世にも雪
【評】一般的な俳句の作法では、「寒椿」「雪」は季重なりとして避けられる。しかし、自らの死後に継続して降る雪の静謐な寂しさは、「寒椿」に降ってこそより際立つだろう。敢えての選択に違いない。

●玻璃●（愛媛県23歳）
寺の子に人見知りなく山つつじ
【評】檀家や様々な人の出入りが多い寺で育つ子は、そうした人々を迎えることに場馴れしている。幼いながら、将来寺を継ぐ気持も固まっているかもしれない。寺の子として、厳しい作法も教えられているだろう。山躑躅を境内の花とするお寺は、都市部ではなさそうだ。ならば、田舎の子供の人懐っこさも加わっていようか。

●日下部 友奏●（群馬県18歳）
人見知りだから湯冷めが心地いい
【評】湯冷めするひとりの時間。傍目は知らず、人見知りを自覚する作者には、こうしたひとりの時間が心地よいのである。

●うろ仔●（北海道27歳）
もずく酢をじょんと飲み干し

液漏れの電池の処理を
調べてねむる
【評】一人の生活とは何か。その意味まで感じさせる見事な表現となっている。不思議なオノマトペ「じょん」が効いている。

●伊藤 しき●（東京都22歳）
図書館の彼女は心を裏庭と呼ぶ
【評】「図書館の彼女」とは、図書館で知り合って、図書館のみで会う女性だろう。本好きで、どこか謎めいた感じの女性。「心を裏庭」と呼ぶ感性には思わず惹かれる。表の庭は身体ということでもなさそうである。

●うたた●（岡山県18歳）
可愛くて格好良くて賢くて
サウイフモノニ
ナレタトシテモ
【評】宮澤賢治の「雨ニモマケズ」の本歌取り（パロディ）。賢治の在りたい自己像に対して、作者の自己像は「可愛くて格好良くて賢くて」と卑近で通俗的なものだが、賢治が「ワタシハナリタイ」と結ぶのに対して、作者は「ナレタトシテモ」と逆接的な言い止しで否定的に結ぶ。ここでは作者の在りたき自己像は完結していないのだ。

●羊夏生●（東京都17歳）
ボディソープ泡立たなかったで

終わる修学旅行一日目
【評】一日の感想が、回った名所旧跡の印象ではなく、ホテルのボディソープの使い心地の悪さ。贅沢な若さとはこのようなものだと教えられる。

●花野 木春●（東京都29歳）
ひび割れた廃家の窓にかかる影
花のレースが好きだった誰か
【評】無人となった廃屋の窓に、花柄のレースのカーテンは引かれたままに残っている。ここで生活した人はどのような人か。「誰か」は若い女性か。時間の残酷さが作者の胸に刺さっている。

●佐藤 ことみ●（秋田県24歳）
コーンポタージュ最後の一粒、
粘るね、お前
【評】「粘るね、お前」は、思わず呟いた一人言。こんな一粒に案外励まされたりする。

●蝸牛●（奈良県35歳）
饅頭食べてるうちは大丈夫
【評】暗い表情で帰ってきた子どもを心配する親の言葉のようだ。お八つの饅頭を美味しそうに食べている姿を見て、深刻なものではなさそうだ、胸をなで下ろす。食欲は救済する。

●藤井 柊太●（神奈川県46歳）

夜のお堀沿いを歩いてそれぞれに
白灯蛾の印象を話した
【評】「それぞれに」だから複数人いる。何かの集まりの帰り道だろうか。薄暗いお堀沿いの道に、白く誘蛾灯が輝いている。これと言った話題もないままに、属目の誘蛾灯の話となる。印象が同じであったか、違っていたかはともかく、読者は、前での集まりの意味も、この集団の意味も、様々にイメージさせられる。深読みを誘う不思議な一編。

●想●（埼玉県14歳）
ペダル漕ぎ
何にでもなれる気がした
十四歳
【評】「中二病」という言葉もあるように、未来への可能性を一番持っているのは、十四歳に違いない。そうした過去への回想の作品と思って読んでいたら、評を書く段階で、作者はまさに現在進行形の十四歳と分かって驚いた。大切に生きて欲しい。

●結城熊雄●（東京都27歳）
放課後の下駄箱きみの上履きに
画鋲のように桜を入れる
【評】上履きが収められた下駄箱は、「きみ」の不在を示す。そこに画鋲を入れるのは悪戯を超えたいじめだが、作者が入れるのは桜の花片。淡い恋心の複雑な両面性を言い止めている。

●霧島黒酸塊●（新潟県21歳）
バナナは生きる理由に入りますか
【評】入ります。

●暗晦潜●（神奈川県28歳）
ポケットに手を突っ込んで
あっためる一人で帰る秋の夕暮れ
【評】「秋の夕暮れ」で結ぶ。三夕歌の本歌取り。西行の「心なき身にもあはれはしられけり鴫立つ沢の秋の夕暮」が一番近いか。「秋の夕暮」が持つもの寂しさの本意を活用している。

●穴棍蛇にひき●（東京都25歳）
紙で切る中指
そして夕焼けが
うつくしくない日などなかった
【評】「夕焼けが／うつくしくない日などなかった」に、確かに一日何事があろうとも、夕焼けに出会った瞬間はこんな感じになっていることに気づかされる。「紙で切る中指」とよく響いて美しい一編となっている。

●ひろみ●（京都府21歳）
雨、とだけ返信が来て
胸底の
小さな街に雨が降りだす
【評】「返信」である以上、「私」は何事かの問い合せをしたので

ある。ただ天気模様を問い合わせたのではないだろう。「雨」の一言に、作者もその「雨」を共有する心模様になっているに違いない。

●春歌●（福岡県24歳）
かえりの荷づくり
思い出の巾着
かびた肩掛けバック
冬の長い廊下
【評】どこからどこへ帰るのか。「思い出の巾着／かびた肩掛けバック」は、それなりに長い滞在期間を思わせる。「冬の長い廊下」に心が投影されているようだ。寂しくまた感慨深い帰りであろう。